はじめに　土地と向き合う人々

メラネシアを通じて社会科学をする

ニューギニア島からフィジーに至る南西太平洋の一帯は、「黒い島々」を意味する「メラネシア（Melanesia）」という名前で呼ばれる。その中でニューギニア島から東に延びる島嶼群の一部をなすのが、本書の舞台であるソロモン諸島（Solomon Islands）である。

この地域は、近代人類学の祖ブロニスラウ・マリノフスキのトロブリアンド（Trobriand）諸島での調査に始まり、第二次世界大戦後のニューギニア高地に至るまで、文化・社会人類学の中心地の一つとして位置づけられる。[*1] そして我々にとってのメラネシアとは、ただ異質でエキゾチックなものへの好奇心を満足させてくれるというだけでなく、我々自身の社会観や人間観そのものを問い直す力を持った他者であり続けてきた。

たとえばマリノフスキは元々、二十世紀初頭の経済思想の一派である歴史派経済学を学ぶ学生であった。人類学へと転向しメラネシアへ向かうマリノフスキの脳裏には、人間の経済活動を功利性のような抽象的概念ではなく個々の歴史的・地理的文脈において見るというこの学派の問題意識があったことは確かである。彼がトロブリアンド諸島で出会った、二種類の腕輪と首飾りの交換を通じて島々が一つの円環へとゆるやかに統合されていくクラ交易は、かつてほの暗い大学の教室で学んだ知識を、南国の太陽の下で鮮やかに具現化するものであっただろう。そして『西太平洋の遠洋航海者』［マリノフスキー 1967］として公刊されたクラの記述は、同時代人であるマルセル・モースを触発し、古代ギリシャ・ローマ以来の西欧政治経済学のただ中に、「贈与」という新たなカテゴリーを立ち上げさせるに至る。

ここから見えてくるのは、近代社会科学にとってのメラネシアとは単にその時々の我々自身の姿を映す鏡なのではなく、少なくともその最良の部分においては、フィールドの経験を通じて我々自身を思いもかけない方向へと打ち返すプリズムの役割を果たしてきたということである。社会科学の一部である文化人類学の民族誌としての本書が目指すのも、まさに、メラネシアで社会科学をするのではなく、メラネシアを通じて社会科学をすることである。つまり、既存の社会理論からメラネシアの現実を分析するのではなく、反対に理論そのものをメラネシアの現実から問い返すような記述を行うことが、民族誌としての本書の賭金と言ってよい。

ではここで問い返したい理論とは何か。それは一言で言ってしまえば、社会理論の主題として「大地」を考えることである。近代に生まれた社会科学は、大地に縛られた前近代から自由な近代への移行を、普遍的な趨勢命題として語ってきた。ところが資本主義が惑星大に広がった二十一世紀、大地は人々の生の背景であることをやめ、再び社会のただ中に出現しつつある。人新世とも呼ばれるこの新たな世界において、我々は好むと好まざるとに関わらず、激甚化する災害や上昇する気温といった、大地の不穏な現れと向き合って生きなければならないのだ。いまという時代は、我々の社会科学的な想像力と、その前提となる特定の自然／文化の形而上学が、ある臨界点に

達したことを暗示している。

ここで我々の視野に、南太平洋のちっぽけな島が浮上する。マライタ（Malaita）島西ファタレカ（West Fataleka）地域に住む「山の民（*wane tolo*）」と呼ばれる人々は、過去数千年以上にわたり熱帯雨林に覆われた急峻な土地（*gano*）の上で生を繋いできた。焼畑でイモを耕作し、簡素なサゴヤシ葺きの小屋に住まう人々は、一見すると我々の対極にある素朴で未開な存在と思えるかもしれない。しかし本書が強調したいことは他にある。彼ら／彼女らの暮らしを微細に見ていくと、そこには彼ら／彼女らにとっても他なる大地が至るところに現れていることに気が付く。本書の記述によって示されるのは、マライタ島の大地は我々にとってだけでなく、ときに当事者自身にすら驚くべき存在であるということである。

これから始まる西ファタレカの民族誌的記述は、ときに我々にとってまったく疎遠なものに思えるかもしれない。けれどもこの世界では、大地・土地が社会生活の無言の背景ではなく、むしろ絶えず社会的なものの領域に侵入し、人々を驚かせているのである。その姿は、どこかしら我々自身と重なって見える。

既存の知が失効する〈外〉の空間において、それでもなお社会科学をすることはいかにして可能か。人類学という学問が繰り返し問い続けてきた問いを、本書は大地・土地という主題において反復する。その先で、他なる土地と向き合い続けてきた西ファタレカの人々の生は、不穏な大地と向き合う我々自身の未来の生へと反復複製されうるであろう。

山の民とその土地

西ファタレカの山の民にとって、土地とはいったいいかなる存在なのか。ここから読者を西ファタレカへの仮想旅行に案内しつつ、その中で当事者と土地の関係性を物語るエピソードをいくつか紹介したい。結論を先取り的に述べると、西ファタレカの人々が向き合っている土地とは、安定的な社会構造や象徴体系が構築される普遍的な基盤でも、歴史的絡み合いや物質－記号的実践によって絶えず構築される流動的な現実でもない。むしろそうした人間のポジティヴな眼差し以前にある「目の前にある時間（*kada i nao*）」[*2]である。

＊

現在西ファタレカ地域を訪れる旅行者は、首都があるガダルカナル（Guadalcanal）島から船または飛行機でマライタ島の州都アウキ（Auki）に到着し、さらに一九六〇年代に作られた幹線道路に沿って北上する。しかし西ファタレカの諸クランに伝わる系譜によれば、数十世代前に遡る最初の祖先は、もはや名前が忘れられた島からカヌーに乗り込み、長い航海の末にこの地に到来したと語られている。この伝承に従い、我々も海からアプローチすることにしよう。

青磁のような色をした南太平洋のぬるい海水が、穏やかな波となって彼方の島影に打ち寄せる。やがてフォウアブ（Fauabu）湾に入ると、まず見えてくるのが切り立ったサンゴの崖の上に巨木が生い茂る岬である。岬の左側は西ファタレカ地域の中心を流れるT川の河口になっており、そこにはこの辺りでは数少ない砂浜がある。浜辺に立ち陸側を眺めると、わずかな平地に植えられたサゴヤシ（*sao*）やココヤシ（*niu*）の彼方に、重畳たる山が半ば雲を被って横たわる。ここから島の反対側までは直線距離でわずか三十キロメートル程度だが、その間にある山は海抜一〇

写真1　祭祀地SB

〇〇メートル以上に達する。

ところでこの岬と木々は自然の景観ではない。実はこの森は、かつてこの辺り一帯の沿岸部に居住していたSBという名前のクランが築いたとされる、同名のSBという祭祀地の跡である。一帯は今もなお禁足地とされ、周りの土地がココヤシ・プランテーションや集落として切り開かれる中、ここだけは数十メートルの木々が生い茂る暗い森が残されている。木々の根元に半ば埋もれるように残るサンゴの石積みだけが、かつては人工的な空間であったことをかろうじてうかがわせる（写真1）。

付近の人々の語りによれば、かつての祭祀地SBは「ちょうど現在のアウキの港のように」さまざまな場所からやって来た人々の通過点であったという。よそから来た人はまず岬に到着し、この辺りにしばらく滞在した後で、よい土地を見つけたらそこに移住した。こうして人々が各地でそれぞれのクランを創始する中、最後までここに留まった集団の末裔がSBクランであるとされる。

ところが今から数世代〜十数世代前、SBクランはこの土地から忽然と消え去ってしまう。他集団との戦闘（*omea*）に負けて皆殺しに遭ったのだと言う者も、悪行が祟り子孫が徐々に減少していったのだと言う者もいる。真相はもはや分からないが、いずれにせよSBクランの土地とされる沿岸部の一帯の正当な土地所有者（*p: lanouna* = land owner）は不在であり、SBクランの傍系親族であるLAクランが土地の実権を握っている。他方、自らを正当なSBクランの子孫であると名乗る集団は、過去数十年以上にわたり現れ続けており、[*3] その中のいくつかはLAクランを相手取った裁判を起こしている。

SBクランやその土地権の行方がかまびすしく騒がれる一方、祭祀地SBはただそこに留まり続ける。祭祀地の中に立ち入ることは現在でも重大な禁忌とされ、破った者には身体の腫れや一時的な狂気などの祟りがあるという。また、中から伸びてくる植物の蔓や根をまたぐだけでも同じ呪いを受けると言われており、祭祀地の脇を通る小道の上に生えてきた根は、行き来する人に害を及ばさないようただちに断ち切られる。

名前や生前の事績、あるいはなぜ一族の滅亡に至ったのかについてもはや何も確かなことが分からなくなってしまったSBクランの祖霊は、人々が保持する文化・社会的な意味の網の目からゆるやかに脱落し、物質の海へと溶け出しつつある。だがこれは単なる忘却ではない。半ば匿名的な存在になりつつある彼らは、土地や生えてくる植物と混ざり合いながら、歴然とそこに存在し生きている［cf. Uchiyamada 1995；里見 2017］。

祭祀地の方から生えてくる植物を切り払う人々は、この日常的な行為の内に、自らの背後にいる祖霊と、自らを取り巻く熱帯の自然環境という二つの外部と向き合う。やがて海が満ち波が祭祀地を洗うようになれば、木々は枯れ石積みも元のサンゴ礁へと帰っていくだろう。他方、この生成流転する現実に抗するかのように、人々は「本来の土地所有者」を、その不在のただ中で想起し続ける。

＊

写真2　Rコミュニティの教会墓地での埋葬

二〇一八年九月頃、西ファタレカ地域の出身で現在は州都アウキに父親とともに住んでいるマリファナ中毒の若者が、アウキ教区の本部である聖アウグスティヌス大聖堂に納められた聖像を破壊した。この不可解で冒涜的な事件は西ファタレカのカトリックコミュニティに衝撃をもたらしたが、引き続き彼の兄弟が告白したこともやはり驚愕をもって迎えられた。

彼によれば問題の若者を含む数人の少年たちは、その数ヶ月前にRコミュニティの教会墓地を暴き、そこに眠るE老人の遺体を掘りだそうとしたというのである。この老人は生前勇猛な戦士（*ramo*）として知られており、若者たちはその戦士としての力（*ramoe*）を得ようとしてこうした行為に及んだというのがもっぱらの解釈であった。

この事件に関連して筆者の友人でバエレレア（Baelelea）地域出身の男性キーキーは次のように語った。

死（*maea*）は昔の言葉だと「フフニテ（*fufunite*）」という。これは「お終いになってしまった人（*wane funu sui na*）」という意味だ。あるいは「グァウエ（*gwaue*）」ともいう。これは「人が死んで空っぽになった（*wane mae ka gwau*）」という意味だ。生きた人を殺すより、敵の手から食べ物をもらうより、死体を損壊することのもたらす死は強い。なぜなら死者はすでにお終い、空っぽになってしまった者だからだ。〔中略〕〔死体の損壊によって「お終い」「空っぽ」な状態が生者へと移り〕死体に触れた者だけでなくその一族兄弟など同じ祖先の加護のもとにある者すべてが死ぬ。ときには男系親族だけでなく非男系親族まで死は伝わる。

祭祀地は通常は霊の力で閉じられている。豚の供犠をし祖先に願い事をするときと、その中に死者を葬るときだけ呪文を唱えて開く。祭祀地を普段は閉じておく理由は、一つは死が常に起こらないようにするためだ。死は地中にあり（*maea to'o i gano*）、それを掘る（*'elia*）と染み出てくる。

（二〇一八年十一月、キーキー）

このエピソードは死という人間の力が及ばぬものと、同じく人間には不可視の領域である大地（地中）の、現地の想像力における密接な重なり合いを示している。キリスト教化以前の伝統的な祖先祭祀では、死者、とくに生前重要な地位に就いていたり大きな力を持っていた者は、その男系出自クラン（*'ae bara*）の祭祀地（*beu aabu*）に埋められ、祖霊（*akalo*）となったこれらの人々もまた、子孫が行う供犠儀礼に応じて畑の豊穣や戦闘での勝利といった真理／力（*mamanae*）を与えるとされていた（→第2章）。

地中には人間を超えた力や危険が貯蔵されているという観念は、ほとんどの人がキリスト教へ改宗し祖先崇拝を放棄した後でも根強く残っている。こうした不可視の領域からのメッセージは、夢や事故、病気といった個人的な出来事を通じて感知され、祖先の加護と監視が今もなお密かに続いていることを人々に実感させる。

だが現実に死者が眠る地中を掘ることは、その世界をこちら側に「染み出」させるおぞましい行為であり、祖

先とのコミュニケーションの手段としては不適切極まりない。盗掘事件が発覚したあと人々は「もし我々がキリスト教徒でなかったら今ごろとっくに死んでいただろう」と嘆息し、かつて祖霊と生者の仲立ちを行う祭司（*wane foa*）に祖先の怒りを鎮めてもらったように、キリスト教の神父（*batere*）に依頼し事を正すべきではないかと話し合った。

＊

「死が埋まる土地」の存在は、マライタ島の土地制度に独特な色彩を与えている。メラネシアの他の多くの地域と同じく伝統的に中央集権的な政治制度を持たなかったマライタ島では、今でも全土の九割以上が未登記の慣習的所有地である。だからといって現地の人々が土地所有観念を持たないというわけではない。現地の通念では、クランの始祖が最初の祭祀地を築いた故地を筆頭として、ある祖先が発見・獲得した土地はその男系子孫に代々受け継がれ、これを他者が力づくで奪ったり購入することは原則的にはできないとされている。この事実を証明するのが祭祀地をはじめとする死者が眠る土地である。祭祀地の囲いやブタを供儀した炉の跡などの人工物は、それを築いた集団がその辺り一帯に居住していた事実を示すものとされ、さらに一族の始まりや移住についての口承と結びつくことで、土地権の主張を可能にする。

二〇一八年一月末、筆者が滞在していた家屋にホストファミリーのFクランの成員が集まり、土地と系譜をめぐるミーティングが行われた。このミーティングは、別の集団との土地争いの裁定を控えたFクランが、この辺り一帯の土地や系譜に関する権威者を集めて証言を固めることを目的としたものであった（→第5章）。当時まだ現地語を学習中であった筆者には具体的な内容は理解できなかったが、集まった長老たちの中でも最も尊敬されていたバエグー（Baegu）出身のチーフが話の山場でやおら立ち上がり、杖代わりに持っていたアラフォロ（*arafolo*、伝統的な武器の一つ）を床にバンバン叩きつけながら図を描き出したのが強い印象に残った。

写真3　Fクランのミーティングで熱弁を振るうワシスビ

終了後、ルームメイトのマイケルが筆者に対して「最後にワシスビ〔チーフの名前〕が立ち上がって床を叩いただろう。あれは「こことここにこういう名前のベウ・アブ〔祭祀地〕がある。掘って（*ela*）みれば分かることだ！」と言っていたんだよ」と説明した。彼によれば、自らの主張に出てくる祭祀地などを現場で指し示せなければ、その話は信憑性がない。反対に「こういうことがあって男が殺され、ここで焼かれた。そのかまどの石はここに埋まっている」と言い、実際に掘って円形に組まれた石が出てきたら、その話は確かだということになる。ワシスビが以前に関わった土地争いでは、彼が指示する場所を掘ったら本当に石が出てきたことがあったという。

だが彼のような権威者であっても、土地の真理をくまなく知り尽くしている訳ではない。実際のところ所有者が分からなくなってしまい、複数のクレイムが乱立する土地はそこかしこに存在する。SBクランの土地もそうした問題を抱えた土地の一つである。すでに述べたように、SBクランの男系子孫を名乗る者が何度か現れ、そのうちいくつかはLAクランとの裁判にまで至ったものの、結局SBクランの後継者として承認された者はいなかった。この状況に対し沿岸部に住む人々の大半はみな口々に「本来の土地所有者がいないのは正しいことではない」と語り、いつか真のSBクラン員がこの地に帰還するべきだと主張する。

＊

ところで現在の西ファタレカでは、中国・東南アジアの経済発展を背景として、商業的森林伐採事業が急激に広がりつつある。多大なロイヤリティー収入をめぐって、土地をめぐる見解の相違は先鋭化し、対立はときに妥協不能なまでに拡大する。他方で熱帯の薄い表土はキャタピラーによって掘り返され、一面に広がる鬱蒼とした熱帯林は、開けた明るい土地へと姿を変える。

ただ意外なことに、当事者たちにとって祖先の森と大地を切り開く行為それ自体は問題だとは考えられていない。

写真4　再び草木に覆われつつある林道

その直接の理由は、二十世紀後半以降の西ファタレカにおいて、「自分たちの土地」としての内陸部の故地への関心が強まっていることにある。

現在の西ファタレカの人々は、移住先での現地住民との対立や人口増加、あるいは気候変動や津波のリスクなどのさまざまな社会的・自然的リスクに直面している。ところが森林伐採事業によって故地に至る道路ができ、鬱蒼とした森が切り開かれれば、現在の先の見えない暮らしに代わる持続可能な暮らしを手に入れることができる。こうした将来像は現在西ファタレカ社会でひろく共有されており、そのための手段として土地所有クランは伐採企業の誘致に乗り出す。そして伐採後の土地に自給・商品作物を植え付け、よりよい暮らしを手に入れることを夢想する。

二〇二〇年一月のフィールドワークで、

筆者は友人とともに放棄された林道を歩いた。古い時期に伐採された箇所はすでに草や灌木に覆われ始めていたが、奥に行くにつれて地肌が露わになり、ところどころで切り倒された大木がそのまま放置されていた。

一緒に歩いていた友人が不意に立ち止まり、足元を指さした。そこには伐られずに残った木から落ちた種が砂利道に落ちて、小さな双葉を芽吹かせていた。

「祖父たち〔大きな木々〕がこれが育つのを邪魔していたんだ。土地が開けて明るく（*kula ka folaa*）なったら成長してくる」。彼がそう言いながら指さす先を見ると、ここからはるか向こう側まで道路上には細い草木が点々と芽吹き、中には腰の高さくらいまで成長しているものもあった。

「それ〔木〕がなくなるということは決してないだろう。木は生えてくる。種も無数にある（*Afutei nia ka sui. Tee fufuwana ai tae. Fufuwana ai oro.*）」「我々の土壌は冷えていて、土地は生きている（*soil gwaria, gano mauri*）」。自信たっぷりに語る彼の隣りで、筆者はまぶしい砂利道とその上に芽吹く鮮やかな緑の鋭い対比に目を奪われていた（→第6章）。

本書について

過去の祖先たちが埋まる土地を掘ることは、「死が染み出てくる」ような重大な禁忌である。土地とは一面において、もはや取り返しがつかない過ぎ去った時間を、目の前にあるモノとして体現している。他方、森林伐採事業を通じて故地に帰還しようとする人々の目論見は、切り開かれた明るい空間に伸び広がる植物の力によって可能になっており、また当人たちも伸び広がる植物に自らを重ねるように、新たな成長と繁栄を待ち望む。自らのほの暗い過去を体現する土地の向こう側には、未来への希望としての土地が広がっている。そし

て故地への帰還、安定した土地とアイデンティティへの回帰を目指す西ファタレカの人々は、何が起こるか分からない土地と自らの身体を掘り棒やブッシュナイフ、ブルドーザーを用いて交わらせながら、この新たな生へと恐る恐る踏み出そうとしている。

かつてカール・マルクスは「人間は自らの歴史を作る。だが自分が思うままにではなく、目の前にある、過去から受け継いだ事情の中で作るのである」と言った。過去＝目の前にある時間（カダ・ィ・ナオ）としての土地と向き合う西ファタレカの人々は、まさに不動のものとなった時間を再び動かし、不確定な未来を生成していると言えるだろう。

メラネシアの人々とその社会性の基盤である土地は、身体と精神、自然と文化などの対立項を横断して出現し、その度ごとに新たな空白の場所を切り開く。本書は儀礼、歴史、政治、人格、生業、インフラストラクチャーといった、西ファタレカの人々の歴史的現在を構成するさまざまな領域と、そこでの多義的な土地の現れを追跡し、他なる土地と向き合う人々の姿を一つの民族誌として描くものである。

先に進む前に、ここで読者に断っておかなければならないことがある。熱帯林に覆われたマライタ島の土地は、人間たちの錯綜した権利や記憶と同じく容易に先を見通せない。民族誌としての本書もまた、こうしたフィールドの感覚と文体的に共振する。つまり、錯綜した他者の現実を重機で切り開き自己の知的プランテーションを造成するのではなく、現地の人々とともに山道を歩き、その過程で自らの身体を通じて感応したものを言語化する、そうした人類学の知的生産スタイルを本書は実践している。

しかし、こうしたフィールドに漂う感覚、あるいは〈空気〉的なもの［橋爪 近刊］は、往々にしてアカデミックな言語による民族誌記述が不得手とする対象である。とくに本書が対象とするソロモン諸島のような「異文化」の記述は、文字の背後にある感覚的・身体的次元への想像力がうまく働かないことがしばしばある。現地の感覚に寄り添うことを旨とする本書が、そのことによって自文化の読者にとって読みにくいものになっていたとしたら、そ

れは筆者の力不足であると同時に、本書の記述に用いられた言語固有の限界でもある。

こうした事態に直面した人類学者は、本来であればフィールドの経験を人類学の概念へと転置し、その拡張を図るべきである［e.g. Strathern 1988］。しかしあくまで西ファタレカについての民族誌である本書は、そうした理論的作業を行う場ではない。

実は筆者は本書の元となった博士論文の執筆と並行して、フィールドで撮影したクリップから二十分ほどの映像作品を制作していた。こうした経緯もあり、本書は「副論文」である映像作品へのリンクを掲載した。できればこれから先の本文を読み進める前、あるいはその後で視聴していただきたいと思う。

言語の民族誌と映像の民族誌は相互に還元不可能だが、どちらも同じ土地、同じ経験から立ち上がった二つのヴァージョンでもある。あるいは両者を並置することで、そのズレと重なりの中から、読者の脳裏で西ファタレカの土地がリアルに再生成されるかもしれない。

大地を切り裂く人々

ソロモン諸島「山の民」の開発・自己・自然

目次

はじめに　土地と向き合う人々　4
メラネシアを通じて社会科学をする　4　山の民とその土地　7
本書について　16

序章　メラネシアから社会と土地を考える　26
社会としての土地　26　自然としての土地　39
不確定な土地を捉える　51

第1部　死が埋まる土地

第1章　海の側に住む「山の民」――調査地の民族誌的概要　66
マライタ島北部西ファタレカ地域　67　現在の居住と生業の形態　73
近代の中の西ファタレカ地域　85　故地への帰還　93

第2章　不動の故地と伸び広がる系譜――キリスト教以前の西ファタレカ　102
「デベロップメント」以前／以後　103
伝統的マライタ社会における土地と系譜の問題　107
系譜と説話　115
ネットワークの継承と切断　129
内旋する過去　137
第3章　「あってはいけない現実」の形成――マーシナ・ルールと自己知識の客体化　140
西ファタレカ地域の近代　141
神と紙の到来　148
新たな伝統とリーダーシップの創出　154
土着の政治・文化的集合性の構築と国家の統治戦略　159
真理の翻訳とその残余　164
「スクル」の二つの顔　172

第2部　生きた土地

第4章　起源の闇と不穏な未来のあいだ
——現代西ファタレカにおける社会変容の深層　178
「関係」とその外　179
キリスト教という切断線　187
クランの基盤　192
起源のパラドックスとその向こう　203
第5章　家を作る者が捨てた石が隅の親石となる
——西ファタレカのクラン間政治と「未発の革命」　208
集団形成のダイナミクス　209
ローカルな問題解決の仕組み　217
「石から生まれた」男　226
クランとその土地　238
第6章　木々が倒れるとき——メラネシアの人間と自然　244

メラネシア人類学と熱帯生態系　248
熱帯生態系と人間の関わり　255
自己の延長としての自然　265
伐採された土地の上で　272

第7章　故地へ帰る道路――インフラストラクチャーと新しい日常の構築　278

新しい大地、新しい日常　279
西ファタレカにおける移動　286
マライタ島の二つの世界　291
帰還への希望　299
道路建設が呼び覚ますもの　304
近代と移動の両義性　312

結論　目の前にある時間　316

本書の内容　316
本書の意義　319
大地の浮上　321
他者としての土地　324

あとがき　326
注　348
参照文献　357
索引　366

凡例

▽本論ではクラン名や地名、集落名などの固有名詞をアルファベット一～二文字の仮名で示す。またサブクランについては「〇－〇サブクラン」のようにクラン名とサブクラン名を「－」を用いて連続表記する。

▽調査地の人名には原則として仮名を用いるが、既存の民族誌やメディア等で公刊されている名前については、実名で記載する。

▽本論中のインタビュー引用には年月日を付記し、さらに必要に応じて話者名とその属性も記載する。

▽調査地で使われている北マライタ諸語（ファタレカ語他）とソロモン・ピジン語はイタリック体で表記する。さらにピジン語については当該単語に続いて原語となる英語などの単語を（*p*… ＝ …）という形式で示す。

▽現地語のアルファベット表記は、現時点で最新の北マライタ諸語の辞書である、言語学者フランティセック・リヒテンベルク（Frantisek Lichtenberk）が著したトアバイタ語の辞書［Lichtenberk 2008］に依拠する。ただし声門閉鎖音については「q」ではなく「'」を採用し、長母音は同じ母音を二つ重ねることにより表記する。

▽ソロモン諸島の通貨であるソロモン諸島ドル（Solomon Islands Dollar; SBD）は「ソロモンドル」または単に「ドル」と表記する。ソロモン諸島ドルを日本円に換算する場合は、調査期間中の為替レートである一ＳＢＤ＝十四円を基準とする。

▽本論中に登場する動植物名は、原則として「和名（現地名；学名）」の形式で表記する。

【著者】橋爪 太作（はしづめ・だいさく）
大阪公立大学現代システム科学研究科・准教授
文化人類学

主な著作に、『大地と星々のあいだで――生き延びるための人類学的思考』（イースト・プレス、二〇二四年）、「未知の故郷への帰還――ソロモン諸島マライタ島の道路建設にみるインフラストラクチャーの両義性」（古川不可知編『モビリティと物質性の人類学』春風社、二〇二四年）、「起源の闇と不穏な未来のあいだ――現代ソロモン諸島マライタ島西ファタレカにおける社会変容の深層」（『文化人類学』八七（一）、二〇二二年、第一九回日本文化人類学会奨励賞受賞）

大地を切り裂く人々
――ソロモン諸島「山の民」の開発・自己・自然

二〇二五年一二月二〇日
初版発行

著者　橋爪 太作　はしづめ だいさく

発行者　三浦衛
発行所　春風社　Shumpusha Publishing Co., Ltd.
横浜市西区紅葉ヶ丘五三　横浜市教育会館三階
〈電話〉〇四五・二六一・三二六八　〈FAX〉〇四五・二六一・三二六九
〈振替〉〇〇二〇〇・一・三七五二四
http://www.shumpu.com　info@shumpu.com

装丁　大田高充
印刷・製本　シナノ書籍印刷株式会社

乱丁・落丁本は送料小社負担でお取り替えいたします。
© Daisaku Hashizume. All Rights Reserved. Printed in Japan.
ISBN 978-4-86816-067-0 C0039 ¥5000E